

ハウスみかんを加害するハスモンヨトウの発生生態と防除薬剤						
〔要約〕 <u>ハスモンヨトウ</u> 成虫は11月に被覆前の <u>ハウスみかん園</u> に侵入し、その後、増殖し被害を与える。ハスモンヨトウの中、老齢幼虫に対しては <u>デミリン水和剤</u> の効果が高い。						
長崎県果樹試験場・病害虫科	専 門	作物虫害	対 象	果樹類	分類	指 導
平成4年度長崎県果樹試験場業務報告						

〔背景・ねらい〕

ハウスみかんの新葉および果実を加害するハスモンヨトウの発生生態を性フェロモントラップを利用し解明するとともに有効な防除薬剤を検討する。

〔成果の内容・特徴〕

①ハウスみかん園での成虫の発生は、9月上旬以降急速に増加し、9月下旬、11月中旬に大きなピークがみられる。このことから、ハスモンヨトウ成虫は11月中旬頃、盛んに飛翔しており、これが被覆前のハウスみかん園に侵入し、その後、好適な温度条件のもとで増殖し被害を与えるものと推測される。

②ハスモンヨトウの4齢幼虫に対して、薬剤が十分付着しても死虫率は低い。しかし薬剤の付着した葉を摂食させるとIGR剤であるデミリン水和剤、ノーマルト乳剤の死虫率が高い。

③このように、4齢幼虫になると薬剤が虫体に十分量付着しても、死虫率は低く防除効果は期待ない。このため、より若齢期での防除が必要である。老齢幼虫に対してはデミリン水和剤、ノーマルト乳剤の付着した葉等を摂食させれば、遅効的であるが殺虫効果は高い。

〔成果の活用面・留意点〕

IGR剤の効果は遅効的であるため食害が進む恐れがある。またノーマルト乳剤は薬害発生の恐れがあるのでハウスみかんには散布しない。

[具体的データ]

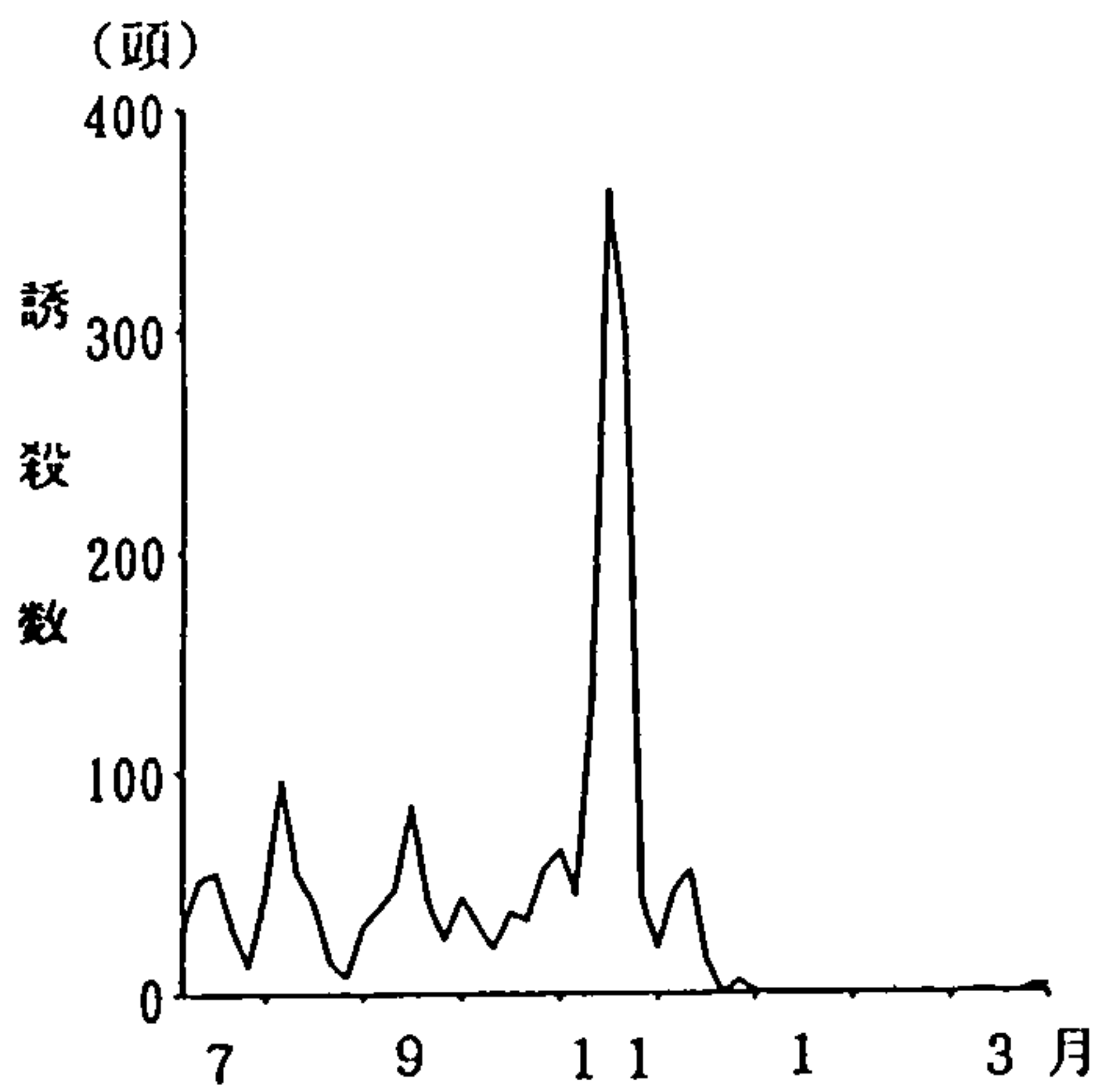


図1 ハスモンヨトウ誘殺数(場内)

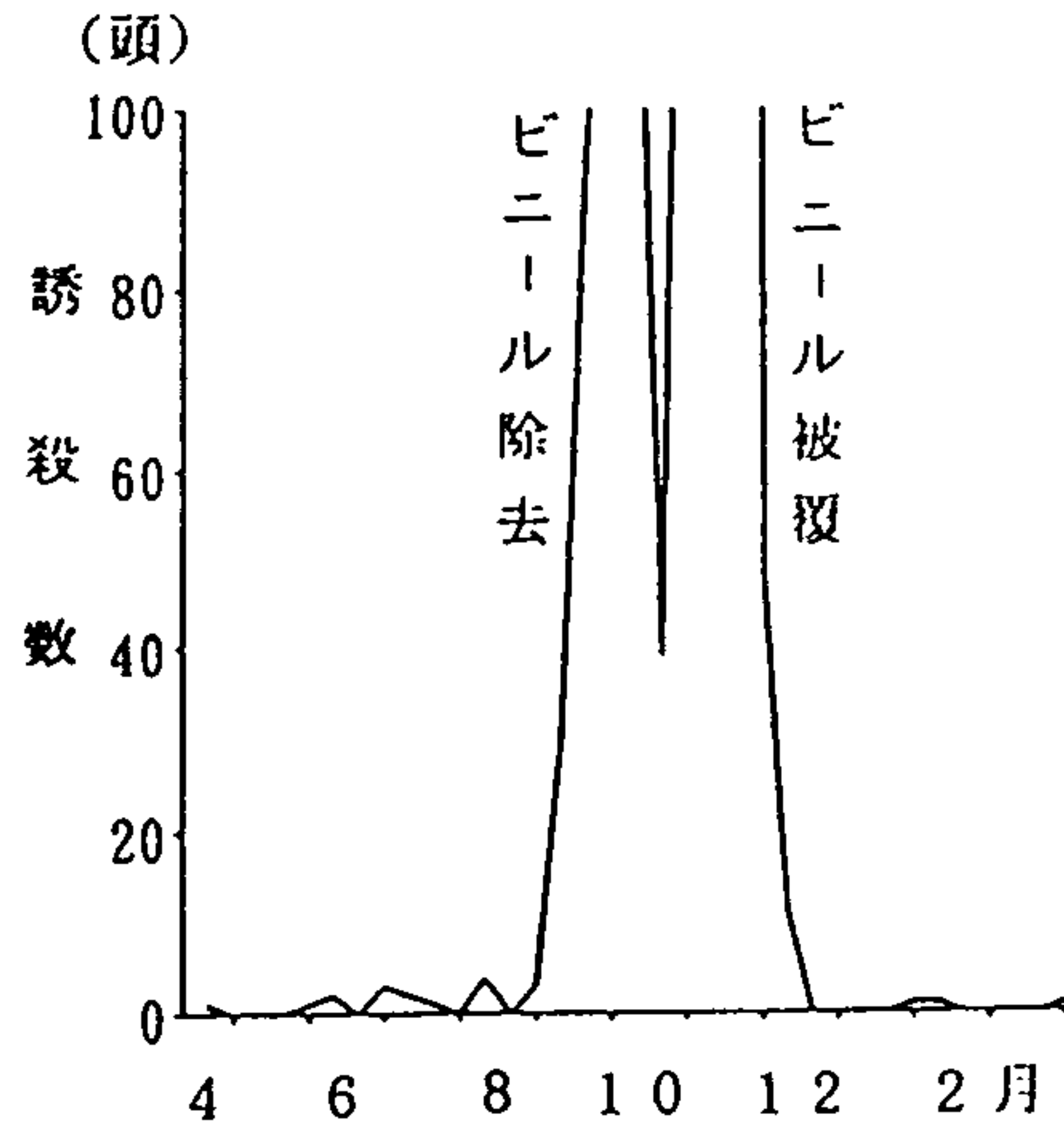


図2 ハスモンヨトウ誘殺数(大村市日泊)

表1 ハスモンヨトウ<sup>2</sup>に対する虫体浸漬による薬剤の殺虫効果

供試薬剤 <sup>Y</sup>	使用濃度(倍)	供試個体(頭)	死虫率(%)			
			1日後	2日後	3日後	5日後
アクトリン水和剤	1,000	30	10	23	23	23
スプラザイト乳剤	1,000	30	0	0	0	0
マフリック乳剤	2,000	30	0	0	0	0
ノモルト乳剤	2,000	30	0	0	7	7
DDVP乳剤	1,000	30	3	3	3	3
ロティール乳剤	1,000	30	20	20	20	27
スミチオン乳剤	1,000	30	17	17	17	17

<sup>2</sup> 4齢幼虫を供試、<sup>Y</sup> 供試薬剤にはアクトリン10,000倍を加用

表2 ハスモンヨトウ<sup>2</sup>に対する食餌浸漬によるIGR剤の殺虫効果

供試薬剤 <sup>Y</sup>	使用濃度(倍)	供試個体(頭)	死虫率(%)			
			1日後	3日後	6日後	13日後
インセカール水和剤	1,000	30	0	0	0	6
アクトリン水和剤	1,000	30	0	0	0	0
テミリン水和剤	2,000	30	0	0	37	100
ノモルト乳剤	2,000	30	0	7	17	100

<sup>2</sup> 5齢幼虫を供試、<sup>Y</sup> 供試薬剤にはアクトリン10,000倍を加用

[その他]

研究課題名：果樹の生態系活用による総合管理技術の確立、カンキツ病害虫の防除法に関する試験

予算区分：県単

研究期間：平成4年度

研究担当者：早田栄一郎、大久保宣雄

既発表論文等：平成4年度長崎県果樹試験場業務報告

残された問題点：ハウスみかん園へのハスモンヨトウの定着要因の解明及びより有効な防除法の開発